
灰かぶり姫の生まれ変わり

那珂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

灰かぶり姫の生まれ変わり

【Zコード】

Z0887V

【作者名】

那珂

【あらすじ】

私は灰かぶり姫の生まれ変わり。家族の絆というものに縁遠く、今は親戚の手を借りて気ままな一人暮らし。お気に入りはハシバミの木の下にいること。ある日、そこでうたた寝をしていたら

『人魚姫の生まれ変わり』の続編です 灰かぶり姫の原作を使っているので残酷な表現があります。

「ねえねえ、
榛^{はしばみ}さん」

私は、家族が嫌いだ
それは私が灰かぶりの生まれ変わりだから
血の繋がり？

愛してもくれない人間なんか、知ったこっちゃないね！

「何？」

「今日の掃除当番代わってくれない？」

「当番なんだから、ちゃんとやりなさいよ」

「えー！ ケチッ」

喧しい。

羊か兔と勘違いするなよ。

さっかーえろ！

よつやく独り暮らしになつたんだから。

好きなこと一杯出来るんだから！

掃除して洗濯してご飯作って、本を読み耽るの。
え？ 家事は元々好きよ？
今日は何を読もうかしら。

「武弥、彼女は？」

「榛^{はしばみ}灰琉実。灰かぶり姫、……シンデレラだ」

「綺麗な人ね」

肩口に切り揃えられた艶やかな黒髪。
目鼻立ちが均整にとれた顔。

凜々しい立ち姿。

「水姫の方が綺麗だけど」

「……そりやどうも／＼／＼／＼」

彼女の相手は誰だろ？

学校の隅に、ハシバミの木がある。

私はこの木がとても好き。

灰かぶりだった私の、本当のお母様の代わりだから。

「あれから五回………だったかしら」

五回も生まれ変わつて、私は実の親に恵まれなかつた。

片親だつたり、両親のどちらかが酷かつたり、そういうえば兄弟姉妹も出来たことがあるけれど、家族という家族はほとんどが酷いものだつた。

暴力・暴言は当たり前、家事を強制され失敗すれば食事を抜かれた。現代では流石に問題ありとして、今は子がない親戚の養子になつた。

優しい人たち。

でも、私を持て余している。

だってね、五回とも実の家族に恵まれなかつたんだもの、ひねくれもするわよね。

だから家を出させてもらつた。

灰かぶりの時はよかつた。

一田惚れだと言つた王子は結婚後も優しくて愛してくれた。今までの人生で一番の、唯一の幸せだつた。

けれど五回の生まれ変わりで王子と会つことはなかつた。

一度あることは一度ある、一度あることは三度ある、三度ある」とは……

正直、もう疲れた。

きつと今回も会えないでしょう。

だから私はこのハシバミの木さえあればいい。

お母様が願つたことを叶えれば。

『生きて幸せに』

私は知つてゐる。

生きていること自体が幸せだということを。

世の中には生きたくても死んでしまう人がいる。

……殺されてしまうことだつてある。

だつたら私は幸せだ。

生きているだけで、いい。

その中で趣味とか、心から許せる友人がいれば、これ以上ない幸せだろう。

ハシバミの木に頬を寄せる。

ここまでが私の日課。

こうして幸せの確認ができるのも幸せだから。

ああ、幸せね

「 い、おいつ起きるー。」

田を開けると、だいぶ田が傾きかけていた。

あー寝すぎたなあ。

どうせ帰つたら一人だし、いいんだけど流石に風邪ひくか。

「つて、無視するなよ!」

「ああ、ごめん。起こしてくれて、ありがと。それじゃ

寝起きでじょじょする田を起こしてくれた男の子に向けてみた。

うん、軽く逆光になつててよくわからんや。

「 だあつだから待つて!」

「 何か用?」

ようやく薄暗闇に慣れてきた田が、男の子の顔を取り込んだ。

そして魂が、打ち震えた

「愛しい灰がぶり

よつやく見つけた」

とある国に美しい娘がいました
娘にはめつたに帰らない父と、意地悪な義母と義姉の2人が家族でした。
義母と義姉は美しい娘をいつも台所の灰のそばで働かせていました
灰かぶりと呼んで召し使いのように扱っていました

それでも娘は、いつか父親の帽子に引っ掛けたハシバミの小枝を墓のそばに植え、毎日涙を流しながらお祈りをしその木を支えに、ネズミや鳥たちと慎ましやかに生きていました

そんなある日、お城から招待状が届きました

義母と義姉は早速綺麗に着飾りました

娘もお城へ行きたいと言いました

けれど意地悪な義母と義姉はヒラマメを灰にぶちまけ、時間内に拾い集めなければ連れていかないと言います

娘は鳩やキジバト、小鳥により豆悪い豆をわけるようにお願いするど、あつという間に終わりましたが、娘が汚いからと置いていってしました

今度は娘はハシバミに金銀を落とすようにお願いすると、美しい銀色のドレスと金の靴を落とし、娘はようやくお城へ行けました

お城へ行つても義母や義姉は気づきません

王子様は一目で娘を気に入り、他の男が娘にダンスを誘つても自分の相手だと言うほどです

娘は王子様とのダンスを楽しみましたが、しかし夕方には帰らないと父親が帰つてくるのでバレてしまいます

三日三晩、娘は夕方になると逃げて帰りました

なので王子様は最後の三日目、いつも娘が降りていく階段の上からコールタールを流しました

そのせいで娘は金の靴を片方脱げてしまい、そのまま去らざるをえなくなりました

次の日、王子様は金の靴にぴったりあう娘をお嫁にすると言い、いつも逃げる娘が逃げ込んだ家に行きました

義母と義姉は大喜びで、まず一番上の姉がはくことにしましたが、指が大きくて入りません

義母は一番上の姉に、妃になつたら歩かなくてもよいのだから切り落とせといいました

言う通りに切り落としたものの、鳩が「血にまみれた娘、本物の姫

は家中」と歌います

次に一番田の姉がはくことにしましたが、踵が大きくて入りません
義母は同じように切り落とせといいました

言つ通りに切り落としたものの、鳩が「血にまみれた娘、本物の姫
は家中」と歌います

王子様はまだ娘がいるはずだと父親に言います

父親は、他は貧相な娘しかないと言いますが、王子様はその娘に
もはかせるように言いました

娘は顔を洗い、髪をとかし、王子様のもとへ向かいました
そして金の靴をはけば、当然ぴったりです

鳩も「血に濡れぬ娘、本物の姫は目の前だ」と歌いました
王子様と娘は結婚することになりました

娘の付き添いは意地悪な義姉たちです

結婚式にくる貴族を狙つてのことでした

娘の両脇に立ちましたが、王子様の姿が見えたとき、鳩が義姉たち
の両目を突つつき始めました

こうして娘は王子様と幸せに暮らし、意地悪な義姉たちは一生盲目
として暮らしました

パタン

……逃げてしまつた。

びっくりしちやつたのよ。

何せ物語の王子様からはまず逃げの姿勢だつたから。

……仕方ないと思ひう。

だつて、怖いのよ。

私たちから探しにはいけない。

おどぎ話の私たちは王子様に見つけてもらわないとだれが王子様だ
なんて、わからないのだから。

いつだつて待つていなくちゃいけない。

だから、私は王子様を恨んでいる。あなた

ん、と。
とりあえず一日経つて、今はお昼休み。
私はと、昨日の男の子と、
あのハシバミの木の下でね。
彼は宮武みやべさん。
彼は宮武みやべさん。

ちなみに同じ年で二つ隣のクラスだった。

「ほんと、逃げんの得意だよな」
「逃げなきや、生きていけなかつたもの

「そりやそつが……そつをせってきたのは、俺か

「親兄弟に縁がないだけよ」

「やつやつて逃げて諦めてきたんだな……俺のことわ

「……」

本当のことだから、なおさら私の口から言ひとはできない。

「見つけてくれたことは嬉しいわ。やつと会えたことも。……それだけだわ」

「五回も見つけられなくて、悪かった。だが、だから、俺を諦めるな！」

肩を掴んでこよないとする手を避ければ、背中がハシバミの木にあたつた。

いつもこの木は私を支えてくれる。

「富武君、私ね……今とでも幸せよ？」

「生きているだけで、つてか？ そんなの、俺は認めねえ！」

だつて、生きたくても死んでいかなければならぬ人にしてみれば、私は幸せ者だ。

さらに、好きなことを好きなだけやれている。

これ以上な幸せはない。

「ふざけんな！」

「幸せに基準なんか、ねえんだよ……」

気が狂いそうになった。

いつまでたっても見つからない妻。

なぜか親兄弟の縁が薄い彼女が、悲しんでいないか、泣いていないか、苦しんでいないか、発狂しそうなほど心配した。彼女を最も愛せるのは自分しかいないからだ。愛しているのに、受けとるべき彼女がいない。それがどれだけ苦しかったか……

「だから、諦めないでくれよ

愛しているんだ」

「どうして 私たちは探しに行けないのかしら」

最初の私は、自ら行動を起こした。

別に王子様の目に留まりたかったなんて思っていた訳じゃなかつたけれど。

行つたらきっと楽しくて、幸せな気持ちになれると思つたから。そこで、その幸せよりも大きな幸せを見つけた。

なのに生まれ変わった時にどうして一番の幸せの為に動くことができないのだろう。

悲しくて、苦しくて。

「諦めるしかなかつた……」

愛されたいのに愛したいのに、与えてくれる受け取つてくれる人がいない。

「見つけられなくて……」「みんな」
「……見つけてくれて、ありがとう」

「「誰よつも、愛してる
」」

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0887v/>

灰かぶり姫の生まれ変わり

2011年7月23日12時22分発行